

しめのひとこと

志免町のいろんなひと、いろんなことをお伝えします！

10

学びを活かす ボランティア

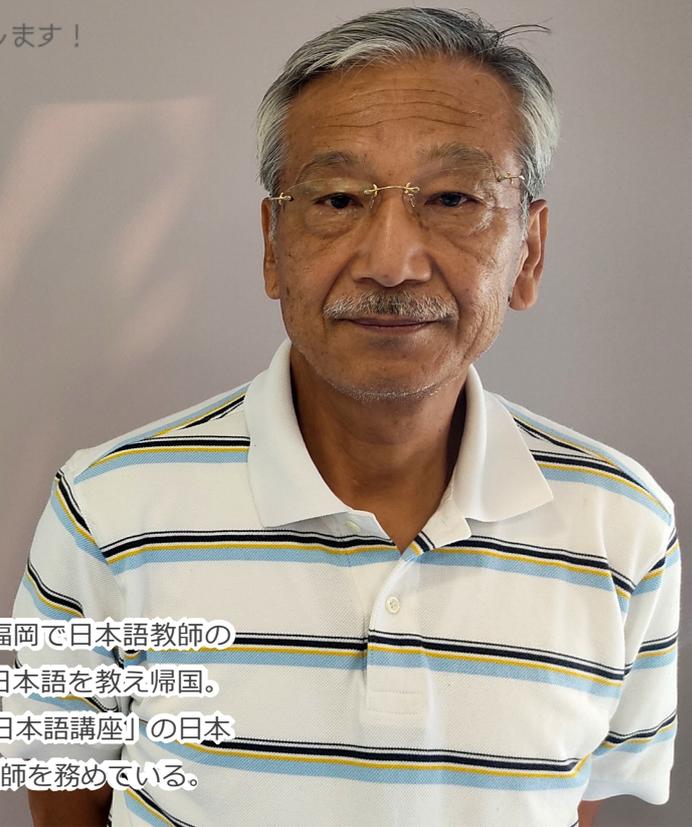
国際交流の原点

おがた けんじ

緒方 憲治

中国の歴史講座講師
外国から来た人のための日本語講座教師

大学卒業後に東京の専門学校で中国語を学ぶ。退職後、福岡で日本語教師の資格を取得し、中国江蘇省にある専門技術大学で4年間日本語を教え帰国。2015年からは、学びを活かし「外国から来た人のための日本語講座」の日本語教師の他、漢詩や三国志など様々な中国の歴史講座で講師を務めている。



志免町で教え始めたきっかけ

会社員として関東各地で働き、退職後に福岡で日本語教師の資格を取得し、すぐに中国の専門技術大学で日本語教師として4年間勤めました。

帰国後は粕屋町の会社で働いていましたが、粕屋町には、2つの中国語講座がありました。そこで、志免町でも中国語を教えられないかなと思い、町に相談しましたが「外国語を教える講座を役場の事業として開催するのは民業圧迫になる。以前に他の語学講座でそのようなトラブルがあり、実施は難しい」という説明でした。町内には、中国語を教える民間企業はなかったと記憶していますが、残念だと思いました。そのときに、町からは「何かほかの講座で講師をしませんか」と新たに提案がありました。それから考えて、漢詩の講座をしようと思いました。また、同じ時期に募集していた「外国から来た人のための日本語講座」で日本語教師も始めました。



伝えたい！中国語の音の面白さ

漢詩の講座は2015年から始めました。漢詩は国

内の愛好者も多く大半の方は日本語訳で理解、鑑賞されています。しかし、漢詩には日本語では表現できない、中国語の四声(しせい)という上下の声調があります。これが日本語にない独特のリズム感を生み出します。また、作詩には韻(いん)を踏む決まりがあり、一定の句末は同じ語感の語を用います。

これで詩に音調が整い、四声と相まって奥深い味わいを与えます。日本語訳だけでは、漢詩の魅力の半分しか賞味できていないと言える訳です。今はCDなどで漢詩を聞けますから、聞くことで漢詩本来の魅力を体験学習できる講座をしようと思いました。

漢詩は、漢字5または7文字を一句として四句で成立します。20か28字の発音を覚えれば漢詩がさらに輝き染み入ってきます。講座では、発声で苦勞された方が多かったですのですが、聞くことは馴染んでもらえたようでした。

日本における漢詩の広がりや、詩吟や書道、絵画などの分野に及ぶと講座を通して知り、私自身も勉強になりました。この講座は1年で終了し、受講者の要望で、翌年から三国志の講座を始めました。



中国の歴史講座の様子



中国の歴史を通して中国を知る 「知る」は国際交流の始まり

最近有名な漫画「キングダム」は秦の始皇帝の若いころを描いたものです。日本はまだ弥生時代で、部落単位の社会でした。秦は2代で潰れ、劉邦(りゅうほう)が漢朝を興します。その漢朝も約400年後、崩壊の危機を迎え各地に英雄豪傑が立ち上がり覇権争いを繰り広げます。これが三国志の始まりで、日中共に最も人気の高い中国の歴史ドラマとなりました。受講者の皆さんも当然のごとく「三国志」の要望になりました。

漢詩の講座から引き続きの参加者も一緒にサークルとして続け、中国の歴史に関する講座は通算で5年目になります。

歴史講座では、唐の時代に最先端の文化が発達したのはなぜか、王朝が革命で次々に変わりますが、その時代背景を紐解きながら歴史を学ぶことは楽しいですよ。それを講座で皆さんに伝えています。

国の歴史が長いことが中国の魅力の一つですね。毎回授業の時には、自分の知っている歴史の雑学を数ページにまとめて、歴史の裏話と一緒に紹介しています。中国に行ったことがない人ほどステレオタイプのイメージのまま理解しています。現在の中国人の考え方や行動は、中国の長い歴史、文化、気候、風土に裏付けられているという事も合わせて知ってもらいたいです。国際交流のための理解が少し広がればという想いもあって、話をしています。



日本語教師として感じること

同時進行で「外国から来た人のための日本語講座」でも日本語を教えています。

生徒は仕事が終わってから通ってくる、志免町在住・在勤の技能実習生が多いです。残業で休んだり、コロナ禍で臨時休館があったりと、講座が続けられない状況が続いています。生徒のレベルやニーズ、意欲は違いますが、生活に必要なレベルまでにはなりますし、頑張る生徒はもっと伸びます。日本語能力検定で一番上のN1まで取得した生徒もいます。先生たちも一生懸命教えます。

講座では、日本語を教えるときには「あなたの国のことを教えてほしい」という国際交流の精神が大事で、相手の国のことをたくさん質問して話してもらおう、と先生たちに伝えています。また、コロナ禍で難しくなりましたが、生徒同士の交流を企画したいと考えています。以前はささやかですがクリスマスにパーティーをして、ビンゴゲームなどで盛り上がっていました。国籍の違う生徒同士の交流も国際交流ですね。現在は、ベトナム、中国、フィリピン、スリランカ、帰国子女の生徒がいます。

最近の生徒を見ていると、何でも質問しなさいねと言っているのですが、恥ずかしいのか、わからない言葉についてなかなか質問してこないですね。

日本にいただけで、24時間日本語に触れられる環境にいますと、もっと意識できると良いですね。

講師としては、教えることで実は教えられていることの方が多い気がします。私が考えもしない質問や、疑問に思っていることを尋ねられることもあり、とても勉強になります。自分が知っていることを伝えたい、学びたい人がいたら教えたいという想いで続けてきました。



取材を終えて

自分の学びを社会に還元する「教える」分野のボランティアは昔から活発な活動の一つです。

歴史講座の講師や、外国人のための日本語講座の教師を通じて、意欲的に学ぶ人に機会があることの大切さや、「知る」の先に、本当の国際理解や国際交流へとつながっていく様子がわかりました。

